

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 19 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530658

研究課題名(和文) 現代社会における自閉症スペクトラム障害の社会認識と医療化に関する総合的研究

研究課題名(英文) A comprehensive study of people's recognition of Autism Spectrum Disorder and its medicalization in contemporary society

研究代表者

田邊 浩 (Tanabe, Hiroshi)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：50293329

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)： 自閉症スペクトラム障害(ASD)である人びとがさまざまな場面において遭遇する問題状況に対して、その周囲の人びとから向けられる「社会からのまなざし」を解明することをめざした。そのために、量的調査および質的調査を実施し、それらによって得られた知見にもとづいて、理論的検討を行った。

当事者家族への聞き取り調査からは、多くの保護者が、さまざまな場面で、子どものふるまいに対して周囲から非難の目を向けられるとともに、そうした怖れをつねに感じていることがわかった。

ASDに関する市民の意識調査からは、ASDが、その名称は知られていても、まだ十分に理解されていないということが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： People with Autism Spectrum Disorder(ASD) encounter a number of problematic situations. In this study, we have investigated on the people's consciousness about ASD. To this end, we have conducted quantitative and qualitative researches. Based on knowledge obtained by them, we have examined some theoretical considerations.

In interview research of parents who have children with ASD, they told that many people blame the behavior of their children with ASD.

In public opinion survey of 1000citizens, we have found that many people know the term of Autism, and they do not have fully understood ASD yet.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：自閉症スペクトラム障害 発達障害 医療化 障害者福祉 差別 福祉国家 科学技術

1. 研究開始当初の背景

「自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder:以下 ASD と略す。)」あるいは「発達障害」は、近年、非常にクローズアップされるようになってきた。それというのも、そうした障害のある人びとが急激に増大しているといわれるようになってきたからである。そして、ASD である人びとが遭遇することになるさまざまな問題状況が顕在化してきて社会問題化している。たとえば、学校という場面では、いじめや不登校の問題などもあるだろう。学校を卒業した後は、社会に適應することが難しく、就労における問題を抱えたり、ひきこもりといった状況に陥ったりすることもあるだろう。

むろん、ASD あるいは発達障害であるということ自体に問題があるわけではない。障害学が教えるように、受け入れる社会の側がある障壁を作り出し、問題状況を生み出していると考えられる。したがって、ASD に対する社会の「まなざし」を明らかにすることが必要であると考えた。

ASD あるいは発達障害に関しては、教育、医療、福祉の各領域で研究と諸実践が進められている。翻って、ASD と社会の関係について問うような社会学的研究はあまり見られていない状況であった。そこで、わたしたちはその間隙を埋めるために、このような研究テーマを設定することとしたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近年様々な領域において静かにそして急速に「社会問題化」しつつある「自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder:以下 ASD と略す。)」に関する社会認識と社会生活場面における「問題状況 (problematic situation)」がどのようなものなのか、そして、問題状況に「医療化 (medicalization)」の進展がいかなる関連を有しているかを明らかにすることである。具体的には、インタビュー調査、参与観察、質問紙調査などの手法を用いて、社会生活場面(家庭生活、学校、就労)における問題状況、ASD の医療化のプロセス、当事者(当事者家族) / 市民 / 専門家(医師、研究者)の障害に対する認識とそのずれについて明らかにする。また、収集したデータの分析を社会理論へと接続し、社会理論を更新する方途についても模索する。

具体的には、以下の4つを課題とした。

(1)現代社会において ASD がどのような「問題状況」を呈しているのかを明らかにすることである。特に本研究では家庭生活、教育現場、就労現場の3場面に焦点を当て、それぞれの場面において、どのような問題状況がどのような背景のもとで生じているのかを明らかにする。

(2)ASD の「医療化」現象にどのようなアクターがどのような関わりをしているのか明らかにする。この課題を通して、医療化論、

セルフヘルプグループ研究や当事者研究を再考する。

(3)一般市民の ASD を中心とした障害に関する認識を明らかにする。どのような人びと(階層、ジェンダー、年齢など)がどのような障害観、社会観を持っているのか、そして当事者や当事者家族、専門家との間にどのような意識のずれがあり、そのような意識のずれがコンフリクトを生じさせる契機となるのか否かを考察を加える。

(4)上記データ分析をふまえたうえで、ASD という事例を通して再帰的近代化論、コミュニケーション論、現代社会論の再考をはかり、調査データに根ざした社会理論を構想する。

3. 研究の方法

本研究は、質的調査、量的調査、理論研究からなる「ASD と社会」に関する総合研究である。

(1)質的調査研究：当事者団体や、ASD に関係する専門家に対して聞き取り調査を実施する。聞き取り調査は、主として半構造化インタビューによる。

(2)量的調査研究：ランダム・サンプリングによって抽出した金沢市民 1000 名を調査対象者として、郵送法による調査票調査を実施する。

(3)理論研究：調査研究の知見などをふまえながら、「ASD と社会」の関係について、行為理論、社会システム理論、文化理論、現代社会論的に考察する。

以上の研究を遂行するために、研究チームを組織し、具体的に以下のような個々のプロジェクトとして研究を実施する。

当事者調査

ASD の当事者団体の協力を得て、ASD 当事者がどのような困難に直面しているのか、またどのような支援を必要としているのか、医療技術についてどのように捉えているのか、などについて追求していく。当事者団体での会合などで交わされている議論を記録・観察したり、個別に ASD の当事者およびその家族に対する面接調査をしたりしながら、データを収集する。

学校・就労調査

ASD と関わりが多い専門職である学校教育関係者に対する面接調査を行う。ASD が学校現場でどのようにとらえられているのか、近年注目されつつある LDHD などの他の「障害」をもつ子どもたちに関する認識とも比較しながら、考察する。

専門家調査

ASD に関わる医療関係者に面接調査を行い、専門家である医師や研究者が、ASD ならびにそれに対する医療技術の発展をどのように捉えているのかを追求していく。

市民調査

金沢市民に対して質問紙調査を実施する。これまでも ASD に関する市民調査は実施されているが必ずしも科学的な調査である

とはいえ、また社会的に十分な検討がなされているともいえない。本研究では、ASDに関する認識に限らず、いわば科学の合理性と社会の合理性といった問題系、例えば、社会での逸脱的な存在を医療技術・科学技術を適用することで「治療」していく動きについて市民がどのように認識しているのか、またそこにどのような分岐(階層・ジェンダーなどの社会的属性による分岐)がみられるのかなどを追求していく。

「ASDと社会」に関する理論研究

現代社会におけるASDの諸問題について、理論的に考察する。すでに研究分担者の竹中均が『自閉症の社会学』において示した、社会学からASDを考え、そしてまたASDから社会学理論について考えるということを押し進め、さらに新たな展開をはかる。

4. 研究成果

主として以下のような知見が得られた。

(1) 当事者家族

ASDの診断を受けた、あるいはその疑いがある子どもをもつ保護者に対する聞き取り調査を実施した。主として、自閉症と診断されるまでの経緯や、現在の子育ての状況、家庭の状況などについて尋ねている。この調査については現在も継続中であるが、中間的にその成果を述べると、以下のとおりである。多くの保護者がASDである子どもが、さまざまな場面で、いわゆる常識的なふるまいから外れる行動をとったときに、周囲から非難の目が向けられることを語っている。そうした偏見の目は周囲の他人にかぎられない。たとえば、祖父母や親戚等の身内であっても、同様なまなざしで見られることがあるということが指摘される。そして、そこから、保護者がまわりの視線を過剰に気にしてしまうことも見出された。

(2) 市民調査

ランダム・サンプリングによって抽出した石川県金沢市の男女1000人を対象としてASDに関する調査票調査を実施した。回収率は58.5%であった。この調査からは、主として以下のような知見が得られた。

ASDに関する認知状況

「自閉症」という言葉を知る人こそ7割を超えていたが、「自閉症スペクトラム障害」という名称についてはわずかに5%の人しか知らなかった。また、アスペルガー症候群や高機能自閉症もあまり知られてはいない。

ASDの原因に関する認識

自閉症に関する認識について、因子分析を行った結果、2つの因子を見出すことができた。第1因子は、「自閉症は心の病」「家に閉じこもりがち」「社会が自閉症を生み出す」「親の育て方が悪い」に関して負荷が高いので、「世俗的認識」と解釈する。第2因子は、「自閉症の原因は遺伝」「自閉症の原因は脳機能障害」において負荷が高いゆえ、「医学的認識」と理解する。1)年齢が高いほど、世

俗的認識をもっている、2)女性のほうが医学的認識をもっている、3)発達障害・精神障害の人との関わりのある人のほうが、医学的認識をもっている、4)発達障害に関する授業・講演を受講したことがある人のほうが、医学的認識をもっている、ということが明らかになった。

ASDと治療に関して

ASDと医療の関係について尋ね、乳幼児の自閉症検診拡充と自閉症の薬物治療に関する態度として、1)年齢の高い人のほうが、乳幼児の検診を拡充することに賛成である、2)学歴の高い人のほうが、検診拡充に慎重である、3)子どものいる人のほうが、検診拡充に賛成である、4)自閉症の原因に関して世俗的認識をもつ人のほうが、検診拡充に賛成である、5)女性のほうが薬物治療に賛成である、6)学歴の高い人のほうが薬物治療に慎重である、ということが明らかになった。

(3) 専門家調査

おもにASDの原因に関する研究を進めている数名の研究者に対して、聞き取り調査を行った。自閉症をどのようなものと考えているかなど、自閉症研究の現状と課題について明らかにした。

その他に、学校調査を実施しているがこれは現在も継続中であり、「ASDと社会」の関係に関する理論的研究とともに、研究成果を取りまとめ中である。

以上のように、本研究によって、「ASDと社会」の関係を検討するための基礎を固めることができたと考える。

なお、成果の一部については、科研費報告書『現代社会における自閉症スペクトラム障害の社会認識と医療化に関する総合的研究』を刊行した。また、現在、それらをもとにして、2014年度内に研究書を出版することを予定している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

松田洋介、「教育格差の批判はいかにして可能か」『人間と教育』2013年秋号、79号、96-103頁、2013年。〔査読無〕

松田洋介、「新自由主義の時代に近代学校批判を継承する」『教育』2013年5月号、808号、87-94頁、2013年。〔査読無〕

竹内慶至、「今月の書評 シリーズ『グローバル化時代の大学論』」、『月刊高校教育』2013年1月号、92頁、2013年。〔査読無〕

田邊浩、「いま、なぜ、地域の『居場所』か?」金沢大学人間社会研究域附属地域政策研究センター『ニューズレターCURES』、99号、1-4頁、2012年。〔査読無〕

竹内慶至、「今月の書評 『医療とは何

か』, 『月刊高校教育』2012年10月号、100頁、2012年。〔査読無〕

竹内慶至、「今月の書評『創造的福祉社会』」、『月刊高校教育』2011年11月号、102頁、2011年。〔査読無〕

竹内慶至、「今月の書評『科学は誰のものか』」、『月刊高校教育』2011年8月号、102頁、2011年。〔査読無〕

〔学会発表〕(計21件)

竹内慶至、「発達障害学生の支援」, 金沢大学地域創造学類FD研究会、2014年3月20日、金沢大学。

田邊浩、「高齢者の社会的孤立と地域コミュニティ」, 石川県健康推進課「お達者ですか訪問事業」結果報告会、2014年3月11日、石川県地場産業振興センター。

竹内慶至、「アイデンティティと社会の相互作用」, 自閉症スペクトラム研究会、2014年1月21日、北陸学院大学。

Manabu OI, Noriyuki TAKEUCHI, Yui MIURA, Shingo NAGATA, Tadashi KUDO, Sanae TANAKA, Natsuko NOJIMA, “Enhancement of public awareness and advocacy of autism: An experimental program in Kanazawa”, AutismEurope2013, September 27th 2013, Budapest Congress Center.

田邊浩・竹内慶至・工藤直志・松田洋介、「地方都市における市民の発達障害認識」, 第85回日本社会学会大会、2012年11月3日、札幌学院大学。

松田洋介、「復興と義務教育-被災地の現在と教育研究の課題」, 第64回日本教育社会学会大会、2012年10月27日、同志社大学。

竹内慶至、「大学における自閉症」, 自閉症スペクトラム研究会、2012年10月5日、北陸学院大学。

松田洋介、「戦後民間教育運動における進路指導の問題の構造とその変容-1960-70年代における全国進路指導研究会の展開に焦点を当てて」, 日本教育学会第71回大会、2012年8月26日、名古屋大学。

竹内慶至、「自閉症の医療化と社会問題化」, 日本保健医療社会学会第216回定例研究会、2012年6月30日、大阪大学豊中キャンパス。

竹内慶至、「自閉症と社会」, 『その暮らしさと自閉症』, 2012年6月10日、金沢市天徳幼稚園。

田邊浩、「発達障害のある人びとに対する支援、関わりの意識-調査データの分析から」, 白山市障害者等自立支援協議会拡大療育検討会議、2012年4月26日、白山市民交流センター。

田邊浩、「白山市市民調査と保護者の分析-発達障害と共生社会に関する意識調査のデータ分析から」, 白山市障害者等自立支援協議会療育検討会議、2012年4月6日、白山市民交流センター。

竹内慶至、「自閉症スペクトラム障害をめぐる社会的障壁」, 第2回金沢大学子どもの

こころサミット、2012年3月17日、金沢大学附属病院宝ホール。

田邊浩、「現代社会と自閉症スペクトラム障害」, 『自閉症のための諸科学の協働：脳・こころ・社会』金沢会議2011、2011年10月10日、石川県政記念しいのき迎賓館。

竹中均、「ライトノベルと自閉症-社会学的アプローチの試み」, 『自閉症のための諸科学の協働：脳・こころ・社会』金沢会議2011、2011年10月10日、石川県政記念しいのき迎賓館。

竹内慶至、「自閉症と社会学の『共生』?」, 『自閉症のための諸科学の協働：脳・こころ・社会』金沢会議2011、2011年10月9日、石川県政記念しいのき迎賓館。

竹内慶至、「自閉症にやさしい社会:共生と治療の調和の模索」, 『科学技術と社会の相互作用』プログラム第4回シンポジウム(主催:科学技術振興機構/社会技術研究開発センター)、2011年5月29日、早稲田大学小野記念講堂。

竹内慶至、「自閉症と社会学-科学・医療化・コミュニケーション」, 第62回関西社会学会大会、2011年5月28日、甲南女子大学。

田邊浩、「大学生の自閉症認識と社会観-大学生の障害と病に関する意識調査より(1)」, 第62回関西社会学会大会、2011年5月28日、甲南女子大学。

松田洋介、「自閉症認識と教育ガバナンスの再編-大学生の障害と病に関する意識調査より(2)」, 第62回関西社会学会大会、2011年5月28日、甲南女子大学。

②竹内慶至、「自閉症スペクトラム障害とのつきあい方?」, 『中之島哲学コレージュ/哲学セミナー、テーマ「ケア」』(主催:大阪大学 CSCD、アートエリア B1、カフェフィロ)、2011年5月27日、大阪「なにわ駅」構内アートエリア B1。

〔図書〕(計9件)

田邊浩編、『現代社会における自閉症スペクトラム障害の社会認識と医療化に関する総合的研究』平成23年度~平成25年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書、全225頁、2014年。

大井学・棟居俊夫・横山茂・菊知充・三邊義雄・三浦優生・竹内慶至、『自閉症という謎に迫る』小学館、全202頁、2013年。

久富善之・小澤浩明・山田哲也・松田洋介編、『ペダゴジーの社会学 パースティン理論の射程』学文社、全251頁、2013年。

溝部明男・竹内慶至編、『発達障害と共生社会の計量社会学的研究』, 金沢大学社会学研究室、全230頁、2013年。

田邊浩、「地域創造学と現代社会論」, 『地域創造学テキスト』, 金沢大学地域創造学類、1-11頁、2013年。

竹中均、『精神分析と自閉症』, 講談社、全324頁、2012年。

田邊浩編、『発達障害に関する市民意識-

発達障害と共生社会に関する意識調査』、全145頁、2012年。

田邊浩、「現代福祉国家のゆくえと公正-ともに生きるための『やさしさ』」、宮島喬・杉原名穂子・本田量久編『公正な社会とは』人文書院、34-55頁、2012年。

松田洋介、「第8章 再帰的な営みとしての教育改革 - 「学びあい」の授業改革と子どもの学習行動」、苅谷剛彦、堀健志、内田良編『教育改革の社会学 犬山市の挑戦を検証する』岩波書店、149-170頁、2011年。

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

報道

「今週の本棚：村上陽一郎・評『自閉症という謎に迫る』」毎日新聞2014年3月9日

ホームページ

金沢大学「障害と医療・福祉」研究会
<http://ristex-kanazawa.w3.kanazawa-u.ac.jp/research/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田邊 浩 (TANABE, Hiroshi)
金沢大学・人間科学系・教授
研究者番号：50293329

(2) 研究分担者

竹中 均 (TAKENAKA, Hitoshi)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：90273565

松田 洋介 (MATSUDA, Yosuke)
金沢大学・学校教育系・准教授
研究者番号：80433233

竹内 慶至 (TAKEUCHI, Noriyuki)
金沢大学・子どものこころの発達研究セン

ター・特任助教

研究者番号：80599390